

論 壇

「話して考える」と「書いて考える」

猪郷久義

〒171-0033 東京都豊島区高田3-14-24ハイライフ高田馬場 (財)自然史科学研究所

"Think talk and Think write"

Hisayoshi Igo

Institute of Natural History, Hai-raifu Takadanobaba, Takada 3-14-24Tosahima-ku, Tokyo 171-0033 (igohisa@mac.com)

はじめに

執筆を依頼されてこれほど筆のすすまない体験は始めてである。2003年に本学会の名誉ある賞「学会賞」を授与されて間もなく、本誌の編集委員からぜひ「論壇」に投稿するようお誘い（要請か？）を受けた。安直に「はい」と返答はしたものの、まず何を書いたらよいのか皆目見当がつかない。これまで学会賞を受賞された諸先生方が「論壇」に書かれたものを参考にしようかと、改めて拝読すると、いずれも格調高い文章で古生物学の奥深い諸問題を論じておられるので、ますます筆をとるのが、いやワープロのキーボードに向かう気が起らなくなる。

冒頭から言い訳と私事で恐縮だが、筑波大学を定年退職してはや10年が経過した。この間に東京のいくつかの私大の非常勤講師をお引き受けし、一昨年二度目の定年になるまでなんとか勤めさせていただいた。お相手は地質学や古生物学専攻以外の若い学生さんで、さまざまな「流行語」や「学生語」に接することが多かった。さらにこの10年間には有難い話で、国内外の出版物に査読制度が確立したためか、その依頼が急に多く寄せられるようになった。主に英文の論文だが、日本語で書かれたものもかなり読ませていただいた。日本語の原稿では文章、学術用語、使用漢字など多くのことに改めて気を配る必要に迫られた。

さて、そろそろ論壇の本筋に入らなければならない。最近勤務先からの帰りがけに、いつものように通勤の車内での立ち読み向けの本をあさりに駅前の書店に入った。そこでこの論壇の題目にした「話して考える」と「書いて考える」という硬派な題目のハードカバーの本が目にとまった。著者はノーベル文学賞受賞者大江健三郎氏である。この本の表紙の題目には、さらにカタカナでルビのようにシンク・トーク、シンク・ライトとあり、さらに御丁寧にもThink Talk, Think Writeと花文字が書かれている。ページをめくりながら前書きにあったある言葉に引かれてこの本を購入した。翌日から電車の中で活字を追うことになったが、読み始めて、不思議にもいつのまにか著者の文章の虜になり、その内容にも魅かれて行くことになった。

むろん日本古生物学会の重要な学会誌「化石」の論壇で、このノーベル賞作家の著作の書評が書けるわけでもないし、その内容を紹介するなど大それたことを意図するつもりもないが、日頃感じている多くの事柄をこの書から学んだ。とくに最近30年ぐらいの間に、自分自身が大学教授あるいは研究者の端くれとしての活動や生活で、「話す」と「書く」という、いわば自分の商売道具に対して、どれだけ真剣な配慮をしたかを反省するまたとないきっかけとなった。この大江健三郎の著作から得たことをからめて、小言幸兵衛となって斯学の「諸問題」を論じ、本誌の「論壇」とすることで、自己反省をしようと決意し、この稿を昨年暮れにほぼ終えた。ところがその時点で「化石」第77号が手元に届いた。開けてみるとこれも編集委員から執筆を依頼されていると漏れ伺っていた、「畏友」斉藤常正氏の論壇が掲載されている。内容は氏の該博な知識から英語の学術用語の問題を論じておられ、投稿はますます気が重くなったが、紙面を汚すのをあえて承知の上で編集委員の度々の督促からなんとか逃避しようと決心した。

エラボレーション (elaboration)

またまた私事で恐縮だが、筆者は大学院博士課程を終了して、始めて就職したのがアメリカのイリノイ州立地質調査所である。渡米直後に日本である程度仕上がっていたフズリナに関する短い論文の原稿を、調査所の地質部門の部長で上司の、M. L. Thompson 博士に見せた。数日後同博士からJournal of Paleontologyに掲載するようeditorに推薦するが、英文にやや難があるので、自分の秘書に渡しておく。彼女は「書く英語」にはきわめて堪能であるから、よく相談して文章をelaborateするようにといわれた。実はそのとき恥ずかしながらelaborateという英語は知らなかった。早速その秘書のおばさんにelaborateとはいかなる意味か尋ねると、e + out laborare to labor とメモ用紙に書いてくれたが、良く意味がつかめない。彼女はデスクの上のウェブスターのColligate Dictionaryを差出して、elaborateとところを指し示した。そこにはwrought out

with great careと出ているのが目に入り、この言葉を理解した。後年elaborate, elaborationに「推敲」という漢語起源のすばらしい日本語があり、文章がとことんelaborateされた著作が、まさに「労作」という意味であることを知った。

さて、購入した大江健三郎の本は小説ではなく、彼がここ2年ほどの間に行った講演の草稿をまとめたもので、その前口上が「言葉のエラボレーション」となっている。書店でこの本を購入に踏み切らせたのが「エラボレーション」なる、なつかしい単語を発見したからにはほかならない。本書に収められている講演草稿は、4章にまとめられている。その内容を要約すると、中野重治など彼が敬愛する作家たちのこと、子供と本について、看護と病氣と死、さらに政治と教育に関する今日的な諸問題である。とくに筆者が印象深く読んだのは最後の章で、以下のような問題が取り上げられている。まずは昨今、声だかに叫ばれている憲法改正、とくにその第9条、教育基本法の作りかえ論議、小泉首相の一連の改革論議や国会答弁の言葉、靖国参拝と中国指導者の言動、さらに新聞論説委員の意見や石原慎太郎と田中真紀子の発言、イラク戦争や日本人の人質事件とそのパッシング、テレビの寵児タレントのあやしげなトークなどなどである。かかるむずかしい問題には、どちらかといえば無頓着で、ノンポリを装う筆者もこの章はすっかり虜になった。

内容にもう少しふれると、エラボレーションのほかに次の二つの言葉が強調されている。引用が長くなって恐縮だが、それは「窮境」と「希求」である。前者は大江のノーベル賞の受賞理由の定訳に関連する。彼の受賞理由は「詩的想像力により、現実と神話が密接に凝縮された想像の世界をつくりだし、現代における人間の様相を衝撃的に描いた」となっているそうである。ここで大江は「様相」はスウェーデン語に合わせて、式場で読み上げられた英訳ではpredicamentとなっていて、様相と訳せないこともないが、彼自身としては「窮境」と受けとめたいと述べている。手持ちの研究社の新英和大辞典によれば、predicamentに「様相」という訳は見当たらないで「窮境、苦境、窮地」などがならんでいる。ではこの「窮境」をもたらししているのは何か。それは言葉が置かれている現状であると大江は言いたいのである。窮境を打開するためには「考える」ことによって、表現つまり言葉をエラボレートしたいということである。幅広く考え注意深く言葉を自分のものとして入念に仕上げないと、相手に言葉は届かないと言うのである。まことに耳の痛い思いである。

次が「希求」という普段めったにお目にかからない言葉である。この言葉は1947年、彼が12歳のときにノートに書き写したという教育基本法と、問題の憲法第9条にも使われていると指摘している。施行間もない教育基本法を中学1年生の大江がノートに写し、その内容に心打たれたというのだから、我が身と比較してただただ驚く。教育基本法の前文は「われらは、個人の尊厳を重んじ、真理

と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。」とあるそうである。憲法第9条は彼によれば、誰でも知っているはずなので、わざわざ引用する必要もないかもしれないと断って引用している。「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」となっていて、ここにも「希求」という耳慣れない言葉が使われている。よく言われるように法律の文章は、きわめて難解な重々しい言葉が使われているのは周知の通りである。希求は一般に使われている表現では望むでもいいし、もとめるでもいい、希望すると書けばもっと自然な感じになったはずであると大江は述べている。しかしここは希求という言葉が選ばなければならないのは、この法律の「文体」だと言うのである。教育基本法は、制定される以前の戦争を含む長い時代に、日本の子供たちを窮境に追い込んだ責任を感じている大人が、未来を託さなければならない子供たちに、心を込めて呼びかけている「文体」で書かれたものであるから、ここは希求でなければならないと大江はつづけている。冒頭の「われらは」がその大人、自分ら自身のとらえ方、責任の所在を表しているのとらえられている。希求は広辞苑によると、その意味は「願いもとめること」ときわめて簡潔に書かれているが、憲法にも希求が使われなければならなかったのが、大江の教育基本法での記述でおのずと理解できる。使われる言葉とその文体などは、われわれが論文などを書くときの文章に、あるいは学会などで講演するときの話に、また学生相手の講義でこれほど気を使っているのだろうか。むしろわれわれが書くものは小説やエッセイとは異なる科学論文である。政治家の記者会見や国会での演説、答弁、テレビタレントのトークショーや司会で飛び出す言葉とは大きく違っているはずである。しかしわれわれにも平素それなりの配慮が欠けてはいないだろうか。ましてや教育基本法に書かれている「個性豊かな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない」という理念で、これまで学生の教育に携わったであろうか。さらに自己反省はつづく。

地層の層厚と走行

かなり以前から学会での講演や学生のゼミで、筆者からみての「若い人達」が、地層の層厚を「そうあつ」と読むのが流行(?)した。これは今でもよく聞かすが、「そうこう」と読むと、地層の走向と同音異義語で誤解されるという配慮から、誰かが使い始めたのが流行したらしい。「そうあつ」の読みは筆者が学生時代からあった。始めてこれを耳にしたときには、粹な感じさえ受けたと記憶する。当時「そうあつ」をゼミで聞いた明治生まれの教授は、それは重箱読みで良くない。正しい学術用語を使いなさいと注意した。ところが最近ある大学の学生を野外調査に連れて行っ

たときに、走向を「そうむき」と発音する学生諸君がいるので驚いていたら、とある査読原稿に「地層の走行はあるいは「層向は」と堂々と書かれているのに遭遇した。前者は章の題目にわざと表記したが、ワープロの普及のおかげかもしれない。このように「重箱読み」あるいは「湯棺読み」は他にも多くあるし、英語でも同音（少なくとも日本人には同じに聞こえるものを含めると）異義語が多数あるのは周知の通りである。さらに日本語では同じ発音で、別の意味に誤解を受けそうなものには、独特な読みを付ける風習がある。たとえば「私立」と「市立」に「わたくし」あるいは「いちりつ」、試案に「ころみのあん」「化学」は「ばけがく」などと付け足す。しかし「層厚と走向」の場合には、文字で書けば一目瞭然であるが、聞いた場合でも次にでる語が全く違うので容易に聴きわけが可能である。また「そうあつ」よりも「そうこう」の方が日本語として耳障りは良いのではないか。ただ層厚も走向もいまや死語となったかもしれない「糟糠の妻」などとは異なり、翻訳語で和製漢語である。漢語のそれぞれの単語は一音節が多いのに、二音節で安定するらしく、良きにつけ悪きにつけ漢字二文字を並べて沢山の翻訳学術用語が、維新後に西欧の学問の大量輸入の結果として出来あがった。

若者言葉の数助詞とオノマトペ

学会発表などで今や定番的な読み方となった数助詞に年数がある。例えば鈴木（1996年）などの引用例は「鈴木いちきゅうきゅうろく」である。西欧の言語では桁が多くなると読みは長くなり、1998などは19と98と2桁にして読むのが通例となっているのは周知の事である。我が日本語の場合は、数詞は比較的短くてすむから「せんきゅうひゃくきゅうじゅうろく」と読んでもそれほど口はつかれない。2005年は「にいまるまるご」と読むか、あるいは「にいぜろぜろご」であろうか。これはどうやら20をカット「まるご」と読むのがトレンドらしい。なんとも聞きづらいつ感じるのは筆者だけか。なお蛇足ではあるが、筆者らが若かりしころ、学会講演などで先人の業績を引用する際に、矢部（長克）とか小林（貞一）などと大先生や大先輩がその場になくても、呼び捨てをすることなどは、おそろしくて出来なかった。おそろおそろ姿勢を正して「矢部先生の1927年の論文を拝見すると、・・・」などと長たらくやっただけである。

さて日本語の数助詞はきわめて豊かで、匹、尾、頭、羽、冊、本、丁、杯など挙げるときりがなく、日本語を学習する外国人にとってはかなり難儀らしい。なかには聞かれてもどれが正しいのか分からないものすらある。若い世代が使う数助詞で、年齢や学年の違いなどはもっぱら1個、2個に定着している。学年あるいは卒業年次が3年違う場合は、3個上か下ですむ。さらに最近は論文の数はいくつもの年配者でも1本、2本と数える人が多い。その論文は巻紙にでも書かれているのかと感じるのは筆者だけであ

ろうか。これはさすがにまだ公式に定着できないらしく、文部科学省や日本学術振興会の書類、大学教官の公募の応募書類などに「論文5本以内を列挙すること」などとは書かれていないが、そのうち論文は本数で数えるのが正式になるかもしれない。この1本、2本なる言い方は剣術使いの言葉からでもきたのであろうか。

このように数助詞が簡素化され危機的に変わっていく一方で、若者のオノマトペは豊かになってきて、なかにはついていけない表現もある。なおオノマトペとは言語学の用語で、フランス語起源、日本語では擬音語、擬声語、擬態語という。学生と野外巡検をやっているときに、この断層面は「つるつる」しているとか「ざらざら」していると手でさわりながら解説すると、レポートにも「断層面の走向は東西で傾斜は90°、さわるとつるんつるんである」となっていて、いっそう感じがつかめるように「ん」がついていた。「破碎帯はぐちゃぐちゃで、北にえんえんと続いているらしい」などの記述はしばしば見かける。査読論文に「かちんかちん」に硬いチャートという記述があつて、どうしようかと考えていたら、次には「ぎんぎん」に硬いチャートというのが出てきて降参した。「ぎんぎん」はコミックではよく使われていると学生さんに教えられた。「がくん」と落ち込んだ断層崖、「めちゃめちゃ」に曲がった褶曲、「さらさら」とした砂層などはよく感じがでているが、著者に修正をもとめる代案に苦勞する。このようなさまざまなオノマトペも、将来的には「地質学用語辞典」などにも正式(?)に採用し、登録しなければならないものも現れてくるやもしれない。適切なオノマトペを好んで作品に取り入れたのは宮澤賢治だそうである。地質学にも造詣の深かった彼の作品の中には、斯学に「びったし」のオノマトペがあるやもしれない。改めて読んでみようか。オノマトペではないが若者語の定番「マジ」は、学生の質問などで対応しているときに「先生それってマジですか?」などと飛び出す。論文の原稿では残念ながらまだ見ていない。これなどあるいは使用年齢にレンジがあるのかもしれない。

塩分濃度と生層序

不適切な学術用語がいつのまにか正しいものと解されて、広く使われている例の一つに「塩分濃度」がある。英語のsalinityの訳は「塩分」か「塩度」で、良く使われる塩分の「分」にはすでに百分率などの分の意味が入っているから、塩分濃度となると「落ちていた落下物」「拾った拾得物」と同じである。塩分濃度は学会等の口頭発表はもとより、論文、教科書、参考書、新聞テレビなどのマスコミでも、なんの疑問も無く広く使われている。さすがに文部科学省の検定済の高校の教科書や、大学入試センターの問題では海水の「塩分」で、「塩分濃度」という表記は出てこない。以前なにげなく聞いていたNHKの人気番組「夏休み子供科学電話相談室」で、高名なNHK解説委員

OBの先生が、質問者の子供が「海の塩分はどうして決めるのでしょうか」の質問に、その先生は何度も「塩分濃度は」を繰り返しているのにあきれたことがある。子供の方が正しい学術用語を使っていた。これに関連して学術用語のみならず一般にもよく出る表現に、「塩分の多い食事」とか「鉄分の多い野菜」などというのがある。これは塩（えん）と塩（しお）が日本語では、混同されていることにも一因がある。「塩分濃度の濃い海水」「鉄分の多い岩石」「珪酸分を多く含んだ酸性岩」など、ときに論文でもよく見かけるが、できればやめたいものである。

さらに学術用語で誤訳あるいは不適切な訳語が、使われている間に正しいものとして定着し、わが学会でも堂々と使われているのが「生層序」である。筆者はこの用語が大嫌いであるが、すでに「正式」あるいは「公式」(?)用語となって広く用いられていて致し方が無い。これはむしろ biostratigraphy の翻訳語である。bio には日本語の「生」という意味はない。「生」は元来「生きています」とか「なまの」という意味であって「生物」という意味ではない。すでに述べたように、多くの漢語が漢字を2字並べて、ニュアンスの微妙に違う語を表し、われわれの身の回りには漢字2つの学術用語や一般の用語がひしめいている。「生層序」は筆者が学生時代からも一部の人の間で盛んに使われ、その頃に出版された「地学事典」にも堂々とのっている。これは「生物層序」あるいは「生物層序学」を省略して言ったつもりが定着したか、生物を化石とは区別したいとの配慮から普及したのかよく分からない。あるいは biochemistry の日本語が「生化学」として定着しているのに、引きずられたのかもしれない。しかし著名な生化学者のなかに、自分は「生物化学」を専攻していますとか「生物化学者」ですと、強調している先生にお目にかかったことがあり、ほっとした。ここは bio を化石を含む生物と考えて、生層序ではなく、生物層序(学)あるいは化石層序(学)としたいが、この提案はすでに遅すぎたようである。なお biostratigraphy に対し「化石層序学」の訳語を提唱したのは、たぶん浅野 清先生で、朝倉書店刊の「微古生物学」や「新版古生物学」などにも明確に書かれている。私と同じ「化石層序学派」は少数派であるが、結構若手でも同調者がおられるのは心強い。2001年には日本地質学会誌編で「国際層序ガイド」と題された好著が出版され、地質学会会員はもとより、多くの方々の座右の書となっているようである。これには biostratigraphy は無論すべてが「生層序」となっている。ところが索引で「bio」あるいは「生」の項を開いてみると興味深い。biofacies は生物相；biochronology は生年代；biohorizon は生層準；biologic time は索引には訳が現れないが生学時間か？；biozone は生帯でもなく化石帯でもなく、何故かバイオゾーン；生物体という語は「生体」では困るが、生環境ではなく「生物環境」である。権威ある学会の訳が「bio」ならびに「生」だけでも混乱し、不統一なのは恐ろしい。ちなみに中国で出版されている地質学用語集では、biostratigraphy は「生

物地層学」と明記されている。なお同じ用語集で、bio がつく用語のすべてが「生物・・・」となっているが、何故か biogenesis だけは生「物起」源説と表記されている。biozone は無論生物帯である。中国にすべて迎合する必要もないが、漢字の本来に見習うのもよしとしたい。

「生」に関連してわが学問分野と直接関係はないが、最近やたらと聞く放送用語に「生中継」がある。ときにライブともいうから、これは「手を加えていない」あるいは「そのまま」のという意味の日本語で、間違いではないのだろうが、耳に聞こえる感じはまことによくない。これらマスコミなど職業上から出てきた、いわば符丁のようなものや不適切な日本語が、一般に流布する例は最近とくに多い。そのうちわれわれの用語の層厚を「そうあつ」と読むのと同じように、生層序を「なまそうじょ」と読む若手が現れるかも知れない。また「なま」が手が加わっていないという意味があるから、フィールドで作成したばかりの柱状図に対して、「生層序」「生柱状」なる新しい用語ができるやもしれない。事実数年前、学生の野外調査の「夜の勉強会」で、当日野外で作成した柱状図の説明を求めると、これはまだ「なま」ですからと断って、一学生から説明を受けたことがあった。学生用語として生「なま」柱状や「なま」層序もやがては広く使われるやもしれない。なお学生さんは「柱状図」と言う言葉はお嫌いらしくもっぱら「柱状」ですませる。

関連して査読の機会に見受ける学術用語で、上述のようにとまどうものがよくあるが、その多くはきちんとした定義を調べないで用いているもので、論外である。同斜構造と単斜構造の違いなどは高度な内容の問題であるが、地層の「層群」は層の単なる複数と考えている人が意外と多い。さらに「厚さ1mの葉理」、「急角度(断面面が)の衝上断層」はまだ笑ってすまされるが、「下位の地層が上位の地層にもぐり込んだ逆断層」という記述となると、読み手も困惑する。また一時期流行した用語で、いつのまにか衰退したり、あるいはますます盛んに使われている用語もある。「堆積接触関係」「構造的上位や下位」などを始めて聞いたときには首をかしげてとまどった。いずれも複雑な付加体の層序・構造の解析の進展とともに出現した表現で、かつては無かったように思う。このような新用語の創作者には敬意を表したい。

マスコミ用語とともに最近よく見かけるのがコンピュータ用語の侵入である。下記は実際に拝見した査読原稿の書き出しの一部である。「この研究は数年前に立ち上げ、毎年のようにリニューアルし、バージョンアップした。」まことに分かりやすい文章ではある。

共産種と初出

最近、高度な内容の「生層序学」の論文で頻繁に見かける学術用語で、個人的に嫌なものをいくつか拾ってみよう。この中には筆者が査読の機会に指摘すると、この日本

語は誤っていないと編集委員からおしかりを受けたものもある。例えば複数の化石種がある地層から「共産する」と表記するのはもはや普通である。これに「共存」と訂正の注文をつけると、英語の co-occur など正式な学術用語として訳したもので、間違いではないという論法である。「共産」はいうまでもなく、れっきとした日本語である。しかし、さる大きな辞書によると「資産・生産手段などをその社会の構成員が共有すること」とある。これから共産主義なる語が派生したのは自明のことである。「化石が共産する」という表記や「共産種」などは読み慣れてくると、筆者のように好き嫌いとはともかく、何となくよさそうな気がしてくる。しかし実際に「この変成岩にはザクロ石と白雲母が共産する」と書かれた原稿にお目にかかる機会に恵まれたが、これはいいかがなものであろうか。

これもよく使われるようになって、定着した「生層序学」の用語に「初出」がある。これは「共産」と同じように、英語論文でよく目につく debut や first occur, first appearance を訳したつもりらしい。ただこのように書く著者が、同じ原稿のアブストラクトの英文では、This species occurs from..... とお書きになるケースが多い。なお「初出」に対して「終出」という用語もあるらしい。上記の日本地質学会訳の国際層序ガイドには first appearance には、初出現ではなく初産出, last appearance には最終産出と訳が与えられている。最近読ませていただいた原稿に「この〇〇(化石種)の初産は××砂岩層の下限である」というのがあり、うっかり初産(ういざん)と読んでしまった。初産は「出」が欠落したのかと思っていたら新しい用語らしい。「化石が産出する」はなんとか許容できても、よく見かける「玄武岩に大粒のカンラン石が産出する」などとなると首をひねる。「産出」なる日本語を権威ある辞書に相談すると「生産すること」「産物がでること」とある。ちなみに「産」の項を見ると「生まれ出ずる」といった意味が列挙されている。化石は地層から生まれえないし、生産もされないから「産出」はおかしい日本語かもしれない。化石やカンラン石は地層や岩石に「含まれていても」ひとりでに産出することは無いのではないか。英語にふれるとボロが出る恐れがあるが、This limestone yields fossils などよく見かけ「この石灰岩は化石を産する」と訳し、The fossils yielded from the limestone というのは「この化石は石灰岩から産した」と訳してもなんとなく違和感は感じない。しかし、著名な英和辞書によると、yield は「特に、耕作または工業過程の結果として産する」がまず出てきて「化石などが産する」というニュアンスの意味はどこにも見当たらない。ウェブスターの辞書でも yield には化石は産していない。アメリカの交差点などに見かける道路標識に、日本の stop の意味で yield と書かれているが、これは「車が出てくるぞー」の意味で、まず化石は出てこない。

われわれの大先輩が舶来の岩石名、鉱物名はもとより、

さまざまな学術用語の訳語をつくるのに苦心した話はよく聞く。彼らはみな若いときから漢籍を読みこなし、漢字そのものをよく知っていたし、語源をきちんと調べたとみえて名訳が多い。しかし、むずかしい漢字を充当したものも多く、今日ではその使用に苦慮する。しかし、安直に新しい訳語が提唱され、これが氾濫するのは好ましいことではない。最近ある論文でさっぱり意味のとれない新用語に遭遇した。古生態に関する論文に「同相的」という新語(?)が目にとまった。同相的は indigenous, またそれに対する言葉が exotic で、こちらは「異相的」だそうである。内容としてはなんとか理解できたが、これにあえて苦言を呈すると、語源を全く無視、あるいは無知で勝手につくった「迷訳」である。indigenous は一般にも用いられているし、生物学の用語では「自生」の意味の形容詞で、動物や植物に用いられている。訳語を提唱した方は、これとは別の意味を強調し古生態学の用語として訳語を提唱したのだろうが、indigenous のどこにも「相」という意味は含まれていないし、同相的という日本語自体が理解に苦しむ。あえて訳すとすれば genous を生かして、「同源の」とでもするほうがまだ良いかもしれない。中国語の学術用語集では indigenus は土着的, exotic は外来的となっている。

さらに筆者の世代で間違いと注意された語に「現生」あるいは「現生種」がある。いずれも現在生存している種という意味であろうが、かつては「現世種」が正しいと教えられ、現生などという語は辞書には無いと怒られた。これは地質年代区分で現世 (Recent) が完新世 (Holocene) に置き換えられたので「現世種」も絶滅したのかもしれない。辞書によっては「現生」は認知されていて「現代に生存・生息していること」とあるが、よく考えてみると「現生種」は現在生きている種の意味では、おかしい日本語である。また「底生」「浮遊生」「固着生」「海生」などはなんとなく受け入れられる日本語ではあるが、「性」で置き換えても意味はより良く通ずる。常用漢字から外されたままの「棲」を再登場させたい。「棲息」や「同棲」は一般的な用語としても必要である。

おわりに

多くの学術用語はもとより、アルファベットをただ並べた略語の氾濫、外来語の長音の表記、地名や人名などのローマ字表記の不統一、化石名のカナ表記、チタンやウランをはじめ化学元素の読みなど、小言幸兵衛が論じたい、あるいは愚痴りたい「国語」の問題点は山積している。最後に「生」がほぼ出そろったところで、貴重な紙面が尽きてきたようである。しかし、拙稿を読み返してみると「話して考える」「書いて考える」と大上段にふりかぶった目論みとは、大きくかけ離れた「一本」になってしまった。筆者らの世代が若かりしころ受けた混乱した国語教育の「せい」にして搁筆、いや PC を終了することにしよう。